

# 『源氏物語』 早蕨卷「梅の香」の贈答歌

方法としての〈和歌〉

磯 部 一 美

## 一、はじめに—問題の所在

早蕨卷は、椎本卷において父八の宮を、総角卷において姉大君を失い天涯孤独になった中の君が、宇治の地を離れ、夫匂宮のもとに引き取られる、その過程を綴った短い巻である。従来この巻は、「大君追慕を基調とする巻である」<sup>①</sup>、「大君物語と浮舟物語をつなぐ巻である」<sup>②</sup>、「大君物語に決着をつけるとともに新たな物語展開を予示する巻である」<sup>③</sup>などといったように、物語の構造を見極めようとする立場から主に論じられてきたのであった。

本稿もこうした一連の先行研究の延長線上に位置するものであるが、特にここでは巻中に描かれた〈和歌〉を通して再検討していきたいと考えている。早蕨卷の歌については、小町谷照彦氏による詳細な論考が既にある<sup>④</sup>。氏は、早蕨卷に記された全十四首の歌すべてを物語の流れに即して考察し、「早蕨卷は、薫と中の君の物語であ

る」と結論づけられたのであった<sup>⑤</sup>。しかし本稿では、本来ならば記されてしかなるべき歌が記されていない——婚姻の当事者たる匂宮と中の君の贈答歌が記されていない、という点に注目したい。この巻には、その短さとは対照的に、多くの歌が散在している<sup>⑥</sup>。にもかかわらず、肝心の当事者たちの贈答歌は記されていないのである。

『源氏物語』において、女君たちが上京する（あるいは賤所から貴所に移る）場合には、必ず当事者による歌の贈答が記されていた<sup>⑦</sup>。紫の上しかり、明石の君しかり、玉鬘しかりである。それは、上京する者と、それを受け入れる側の心の結合が贈答歌という形によって表現されているのであり、その詠歌は後の物語を展開させていく、大きな力となっているのであった。

繰り返すが、早蕨卷には匂宮と中の君の歌の贈答が記されていない。しかし、匂宮も中の君も歌を詠んでいない訳ではないのである。

本稿では〈記されない〉ことの意味を、〈記された〉和歌から導

き出したいと考えている。

## 二、二つの「梅の香」の贈答歌

### (1) 相似する場面

早蕨巻には、中の君と匂宮の贈答歌が記されない代わりに、都における匂宮と薫、宇治における中の君と薫の贈答歌が、それぞれ近接した時間の中で記されている。これらの場面は、それぞれがまったく無関係とは思えない程に表現が類似している。まずは、その二つの場面掲げる。

**A** 内宴など、もの騒がしきころ過ぐして、中納言の君、心にあま

ることをも、また、誰にかは語らはむと思しわびて、兵部卿宮の御方に参りたまへり。しめやかなる夕暮なれば、宮、うちながめたまひて、端近くぞおはしましける。箏の御琴掻き鳴らしつつ、例の、御心寄せなる梅の香をめでおはする、下枝を押し折りて参りたまへる、匂ひのいと艶にめでたきを、をりをかしう思して、

a 折る人の心に通ふ花なれや色には出でずしたに匂へる(匂宮)

とのたまへば、

b 見る人にかごとよせける花の枝を心してこそ折るべかりけれ(薫)

わづらはしく」と戯れかはしたまへる、いとよき御あはひなり。

〔早蕨巻三四八～三四九頁〕<sup>8)</sup>

### B

御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見過ぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば、まして、「春や音の」と心をまどはしたまふどちの御物語に、をりあはれなりかし。風のさと吹き入るるに、花の香も客人の御匂ひも、橘ならねど音思ひ出でらるるつまなり。つれづれの紛らはしにも、世のうき慰めにも、心とどめてもあそびたまひしものを、など心にあまりたまへば、

c 見る人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香ぞする(中の君)

言ふともなくほのかにて、絶え絶え聞こえたるを、なつかしげにうち誦じなして、

d 袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる(薫)

たへぬ涙をさまよく拭ひ隠して、言多くもあらず、「またもなほ、かやうにてなむ。何ことも聞こえさせよかるべき」など聞こえおきて立ちたまひぬ。〔早蕨巻三五六～三五七頁〕

本文Aは、大君の死の翌春、忙しい新年の儀式を終えた薫が久方ぶりに匂宮のもとを訪れる場面である。折しも匂宮はお氣に入りの

梅の花を賞翫中で、薫は「下枝を押し折りて」句宮のもとに参上する。句宮は梅の香と薫の体香とが交じりあつて芳香を漂わせるのに興を覚え、薫に歌を詠みかけ贈答する。一方本文Bは、上京を明日に控えた中の君のもとを薫が久しぶりに訪れ、交誼を求める場面である。本文Aと同様、眼前には梅の花が美しく咲き誇っている。大君鍾愛の紅梅、それに薫の体香が交じりあつて、中の君は昔を想起させられずにはいられない。思い余つた中の君は薫に歌を詠みかけ贈答する。

これらの共通点として掲げられるのは、どちらも眼前に梅の花が咲き匂っているという情景の中で、訪問者・薫の体香に触発されて歌を詠みかけているという点であろう。また和歌的情趣に満ちた美的世界がそこには現出しているという点でも両者は共通している。本文B「春や昔のと心をまどはしたまふ……」<sup>37</sup>「橘ならねど昔思ひ出でらるる……」には著明な和歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」<sup>38</sup>古今集 卷第十五 恋歌五<sup>39</sup>、「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」<sup>38</sup>古今集 卷第三 夏歌<sup>40</sup>が引用されている。一方の本文Aは、本文Bのよくな明瞭な引歌こそ指摘できないが、薫の「下枝を押し折る」という行為がそれ自体が、次の古今集収載歌に見られるような和歌的世界を背景としているのである。

題しらず

素性法師

【源氏物語】早蕨卷「梅の香」の贈答歌（磯部 一美）

eよそののみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

[37] 卷第一 春歌上

梅の花を折りて人におくりける ともものり

f君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

[38] 卷第一 春歌上

このように、一見関係性の希薄にみえる本文A・Bではあるが、実は非常によく似た表現構造をしているのであり、これらはまったく無関係なものとして看過されるべきではない。以下、両場面について、さらに仔細に検討を試みることにする。

## (2) 句宮と薫の贈答の場面

大君の死から三ヶ月、新しい年を迎えながらも薫の悲しみは癒えることがない。思いあぐねた薫は「心にあまることをも、また、誰にかは語らはむ」<sup>41</sup>【本文A参照】と、句宮邸を訪れる。句宮は、「梅花雪を帯びて琴上に飛ぶ」<sup>42</sup>の如く、端近に出て琴を掻き鳴らし、白梅を賞翫している最中なのであった。そこに薫は「下枝を押し折りて」<sup>43</sup>参上する。薫のこの行為は、前節で確認したように、和歌的情趣の世界を体現しようとするものであった。この場面は、漢詩の美的世界を体現する句宮と、和歌の美的世界を体現しようとする薫の緊張関係によって成り立っている。

a歌の「したに匂へる」<sup>44</sup>には、薫の中の君への恋情を読み取るの

が一般的である。<sup>11</sup>「薫、あなたはこの白い梅の花と同じで、表（顔色）には出さないけれど、密かに中の君を慕っているのではないか」との意で、中の君への横恋慕を疑う句宮が、薫を牽制（あるいは挪揄）する気持ちを込めて詠出したものと理解されている。

一方、薫のb歌は、「ただ見ているだけの私ですのに。それは言いがかりというものです」と、句宮の猜疑心を軽妙に受け流す。しかし下句では「心してこそ折るべかりけれ（もつと気をつけて折るべきでした）」と、中の君への未練を滲出しているのであり、そこには句宮のもとに中の君が引き取られることを喜びつつも、恋情を棄てきれない薫の複雑な心中が吐露されている。<sup>12</sup>つまりこの場面は、中の君をめぐる二人の男たちの攻防——緊張関係が、和歌を中心として記されているのであるが、しかし果たしてそれだけであろうか。<sup>13</sup>

ここで注目したいのは、句宮の贈歌の「花」の解釈である。今まで句宮の贈歌は、下句ばかりが注目され、「花」については何の解釈も施されてこなかった。しかし薫の答歌の「花」に中の君の諭を認めるのが通説化しつつある中で、<sup>14</sup>それを受けているはずの句宮の贈歌の「花」に中の君の存在を認めないのは如何なものであろうか。梅の花を女の諭とするものには、例えば次のような歌がある。

題しらず

読人知らず

g 梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる

[35 古今集 卷第一 春歌上]

h 梅の花よそながら見むわぎもこがとがむばかりの香にもこそしめ  
[27 後撰集 卷第一 春上]<sup>16</sup>

g歌は、「梅の花に近づいたあの時から、誰の移り香かと人に咎め立てられるほどの匂いが染みついてしまった」との意で、「梅の花」に女の姿がよそえられている。h歌も同様の発想で、「梅の花は離れて賞美しよう、愛しい人が誰のものかと咎めるほどの香が染みついてしまうから」との意。いずれも題知らず、読人知らずであることから、広く人口に膾炙していたものと考えることが可能であろう。梅の「花」は、女の諭なのである。

もし句宮の贈歌の「花」に、中の君の存在を認めるならば、この歌の解釈は「この花（中の君）もまた、薫、あなたを慕っているのでしょうか。あなたが手折ったことで、それに靡くようにいい匂いを放っている」と解釈できることになる。句宮が薫と中の君の仲を案じていることは、例えば、大君逝去に憔悴しきつた薫の姿に、句宮が「音をのみ泣きて日数経にければ、顔変りのしたるも見苦しくはあらで、いよいよものきよげになまめいたるを、女ならばかならず心移りなむ……なまうしろめたかりければ、いかで人の譏りも恨みをもはぶきて、（中ノ君ヲ）京に移ろはしてむと思す」〔総角三三八頁〕と発想することからも容易に理解できる。しかしやはり、句宮に常々劣等意識を抱かせてきたもの、それは薫の持つ香ではなかったか。薫の体香に劣等感や闘争心を抱く句宮の姿は、既に句宮

巻に見ることができるとであった。

(薰ノ) はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く……なつかしき追風ことにをりなしがらなまさりける。かく、あやしきまで人の咎むる香にしみたまへるを、兵部卿宮なん他事よりもいどましく思ひして、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御前の前裁にも、春は梅の花園をながめたまひ……。

〔匂宮巻二七頁〕

ここには薰に手折られることよつて芳香を増す花々に、手折られることを望む女たちの姿が暗に重ね合はされている。匂宮は女たちを虜にする薰の体香に対抗しようと香を焚きしめ、このことによつて二人は、「匂ふ兵部卿宮、薰る中将」〔匂宮巻二八頁〕と呼び慣わされたのであった。

薰の美質である体香を最大限に生かすもの、それこそが「梅の香」なのであり、今、薰は、その梅の花の「下枝を押し折りて」、匂宮のもとにやってくる。この超越的な美を現前せしめる薰に、匂宮は、「をりをかし」く感じつつも、しかし一方で美を体現しているという点において薰との圧倒的な差——強烈な劣等意識を抱かないわけにはいかない。匂宮の詠歌には、薰への劣等意識と、それゆえに生じる中の君への猜疑心、そして中の君を奪われまいとする焦燥感が

〔源氏物語〕早蕨巻「梅の香」の贈答歌（磯部 一美）

反映されているのである。

総角巻末から早蕨巻前半にかけて、匂宮が中の君の処遇を気にかける場面は幾度となく語られている。が、中でもこの贈答の直後の匂宮の中の君への消息は「浅からぬ仲の契りも絶えはてぬべき御住まひを、いかに思ひえたるぞ」とのみ恨みきこえたまふも……〔早蕨三五二頁〕と、今までにない強い口調のものであり、これによつて中の君の上京は一気に加速することになる。

匂宮の贈歌には、匂宮の薰への劣等感とともに、上京を拒み続ける中の君への猜疑心、さらには中の君を薰に奪われてはならないという焦燥感が記されている。それは換言すれば、匂宮と中の君の関係が今なお不安定なものでしかないことを暴き出しているのである。

### (3) 中の君と薰の贈答の場面

いよいよ上京という前日の朝、薰は宇治に中の君を訪れる。悲しみに沈む中の君は対面を渋るものの、女房らの説得に仕方なく対応に出る。しかしこの対面は、中の君の心情に微妙な変化をもたらすことになる。

(薰) 「月ごろの積もりもそこはかとなけれど、いぶせく思ひたまへらるるを、片はしもあきらめきこえさせて慰めはべらばや。例の、はしたなくさし放たせたまひぞ。いとどあらぬ世

の心地しはべり」と、聞こえたまへれば、(中ノ君)「はしたな  
し」と思はれたてまつらむとしも思はねど、いさや、心地の例の  
やうにもおぼえず……」など、苦しげに思いたれど、「いとほ  
し」など、これかれ聞こえて、中の障子の口にて対面したまへ  
り。……(薫)「渡らせたまふべき所近く」このごろ過ぐして  
移ろひはべるべければ、夜半、暁とつきづきしき人の言ひはべ  
るめる、何ごとのをりにも疎からず思しのたまはせば、世には  
べらむ限りは、聞こえさせうけたまはりて過ぐさまほしくなん  
はべるを、いかがは思しめすらむ。人の心さまざまにはべる世  
なれば、あいなくやなど、一方にもえこそ思ひはべらね」と聞  
こえたまへば、(中ノ君)「宿をば離れじと思ふ心深くはべるを、  
近く」などのたまはするにつけても、よろづに思ひ乱ればべり  
て……。

〔早蕨三五四―三五六頁〕

この対面に際して、薫は二つのことを中の君に訴えている。一つ  
は、鬱陶しく晴れない現在の気持ちをも、親しく語り合うことで慰め  
たい(慰められたい)ということ。今一つは、上京後は今まで以上  
に親しい交際をしてほしいというものである。大君逝去の折りには  
法事の一切を取り仕切り、また此度の中の君の上京に際しても、そ  
の細部に至るまで諸事万般取り仕切ってきた薫であったが、匂宮の  
妻となつて二条院に引き取られて後は、それもかなわない。中の君  
を失つてしまふという現実には、薫はひたすら今後の交誼の約束を取

りつけようとするのである。

しかし中の君の方はただ困惑するばかりで、これに応じようと  
しない。「はしたなくさし放たせたまひそ」に対して「はしたなし  
と思はれたてまつらむとしも思はねど……」、「渡らせたまふべき所  
近く」に「近く、などのたまはするにつけても……」と、ただ薫の  
ことばを鸚鵡返しのように口にする中の君は、なるほど他者を慮る  
だけの精神的余裕はないのかもしれない。しかし一見上京を拒んで  
いるように見えるこれらの発言も、実は薫のことばに応えることに  
よつて、その思いを掬い上げていると言えるのではないか。薫とは  
今後も友好関係を保ちたいという思いが、中の君にはある。そして、  
その薫の邸近くに、自身が移り住む二条院もまたあるのである。茫  
漠とした上京への不安を抱きつつも、中の君は上京後の自らの姿を  
想像する。中の君の心は、薫の言葉に導かれるように京へと向き始  
めていつているのである。そして、その延長線上にあるのが本文B  
の贈答歌なのであった。

c 歌の上句「見る人もあらしにまよふ」には「あらし」の意が掛  
けられている。<sup>18)</sup>「今後はこの梅の花を賞美する人もいなくなるこの  
山里に、昔を思い起こさせる花の香がする」との意で、「見る人も  
あらし(いない)」「(未来形)に対して、「むかし」(過去)が想  
起され、それを「山里」(現在)が結びつけるという構図になつ  
ているのだが、ここで注意したいのは、引歌にも見られる「本稿三  
十頁上段に掲出」、「むかし」という語である。

「むかし」は、早蕨巻に十例見られるが、そのほとんどは亡き大君に關連して（あるいは連想させるものとして）使用されている。本文Bにも（c歌を含めて）三例あり、このことは吉井美弥子氏の言われるように、<sup>(19)</sup>中の君が大君との日々を「昔」（＝過去）として位置付けようとしていると考えることができるであろう。さらに、これら三例が全て和歌の中に使用されていることを鑑みると、中の君は大君を和歌的情緒の中に、美しい思い出として位置付けようとしていることも分かるのである。

一方で、この歌が多分に薫を意識して詠んでいるということは、「むかし」に続く「おほゆる花の香」からも見てとることができる。また本文Bの地の文「つれづれの紛らはしにも、世のうき慰めにも、心とどめてもあそびたまひしものを」（大君が）紅梅を賞翫していた）も、中の君しか知らない事実であり、中の君はそれを直接薫に向かつて詠出してはいない。つまり中の君は、薫と共有できる過去のみをことばに発しているのである。

さらにこの贈歌は、薫の答歌「袖ふれし」にも明らかのように、「袖の香」を強く意識させるものであった。ここには、あの添い臥しの一件もまた想起されているのである。前年の秋、なかなか靡かない大君に、老女房弁と結託して二人（大君・中の君）の寝所に忍び入った薫は、<sup>(20)</sup>既のところで大君に逃げられ、中の君と「をかしくなつかしきさまに語らひて」「総角二五三頁」一夜を明かしたのであった。このことが中の君の口から語られることは一度もないが、

【源氏物語】早蕨巻「梅の香」の贈答歌（機部 一美）

しかしあの夜の薫の実直な態度は、その後の大君の葬送、上京への配慮などに見られる誠意と相俟って、中の君に大きな信頼・安心感を与えたはずである。ゆえに、この「むかし」には、感謝とも信頼とも取れる複雑な思いが込められているのであるが、しかしそれが「むかし」という一語で語り収められている点は見逃してはならないだろう。ここには、大君と過ごしたかつての（春）の情景と、昨年（秋）の添い臥しに始まる中の君と薫との関係が、「むかし」の一語に凝縮され、「過去」のものとして位置付けられているのである。中の君の歌の下旬は、宇治で過ごした半生を総括しようとするものだったといえるのではないか。

こうした姿勢は、それが中の君からの贈歌であるという点からも指摘することができよう。男女間で行われる贈答歌は、男から女に読みかけるのが通常の形態だが、ここではそれとはまったく正反対になっている。すなわち歌を詠みかける女と、それに応える男。そしてその場の雰囲気耐えきれず、涙を拭いつつ去っていく男——。この逆転した贈答の形は、未来に向けて自らの新しい道を歩み出すとする中の君の（決意）にも似た強い思いを、個人の意識のレベルを超えて、物語が描こうとしていることの表れなのである。

### 三、おわりに

本稿では、中の君の上京の場面において、なぜ当事者同士（匂宮と中の君）の贈答歌が描かれていないのかということ、描かれた

和歌——匂宮と薫、中の君と薫の贈答歌から考察してきた。

本文Aにおける匂宮の歌は、上京を渋り続ける中の君に薫への心の傾斜を疑うものであった。それは換言すれば、両者間の愛情の不安定さを示してもいた。一方本文Bにおける中の君の歌は、薫の訪れに亡き大君を偲びつつも、上京を前にして、過去にはなく未来に向かつて生きていこうとする中の君の心情を表したものであった。

これらの贈答歌は、薫という媒体を通して、微妙にすれ違ってしまった二人の心情を、鮮明に描出しようとしているといえるのではないだろうか。中の君を信じ切ることのできない匂宮と、匂宮への愛情というよりは、与えられた未来に懸命に立ち向かつていこうとする中の君と。そしてそんな中の君の姿には、その後の幾多の試練に対応できるしなやかな強さを見い出すことができるのであり、よってこの本文A Bの場面は、正編における紫の上や明石の君、玉鬘の場合と同様に、中の君の後の物語を導くものとして、上京の際の贈答歌として、認めることができるのである。

注

- (1) 篠原昭二「早蕨」(國文學解釈と教材の研究 昭和四一・六 學燈社)、鈴木一雄「橋姫・椎本・総角・早蕨・宿木」(源氏物語講座 第四卷 各巻と人物Ⅱ 昭和四六・八 有精堂)、榎本正純「早蕨 巻の和歌二首—源氏物語における和歌の一問題—」(平安文学研究 第四十九輯 昭和四七・一二)など。

- (2) 前掲鈴木論文、長谷川正春「早蕨」(國文學解釈と教材の研究 昭和四九・九 學燈社)、吉岡曠「中の君の都移り」(講座源氏物語の世界(第八集) 昭和五八・六 有斐閣)など。

- (3) 注(1) 掲出榎本論文、重松信弘「中の君を中心とする物語 早蕨—宿木」(源氏物語研究叢書Ⅳ増訂「源氏物語の構想と鑑賞」 昭和五七・三 風間書房)など。しかし「新たな物語」が、果たして誰のどのような物語なのかについての具体的な言及はない。

- (4) 小町谷照彦「源氏物語第三部—「早蕨」の歌ことば表現を読む」(國文學解釈と教材の研究 昭和六一・一一 學燈社)

- (5) これに対して吉井美弥子氏は、その論「宇治を離れる中君—早蕨・宿木巻」(源氏物語講座 4 京と都の物語・物語作家の世界) 平成四・七 勉誠社)の中で、早蕨巻を「薫と夫匂宮との間に中君がはさまれる三角関係の物語」と位置づけている。

- (6) 中の君の上京を語るこの短い巻には、和歌が十五首散在する。その内訳は以下の通り。薫五首(贈1答3独1)、中の君四首(贈1答2独1)、弁の尼二首(贈2)、匂宮一首(贈1)、阿闍梨一首(贈1)、大輔の君一首(贈1)、女房一首(答1)。なお分類のし方については、新編全集本「源氏物語作中和歌一覽」(鈴木日出男編)に拠る。

- (7) 紫の上は二条院に引き取られた数日後、明の石君は大堰の邸に落ち着いた数日後、玉鬘は六条院に引き取られる前に、それぞれ源氏と歌を交わしている。

- (8) 「源氏物語」の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集本(阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳 小学館)に拠る。

また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(9) 古今和歌集の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集「古今和歌集」(小沢正夫、松田成穂校注・訳 平成五・一一 小学館)に拠る。なお、分類項目などの上に記した算用数字は、新編国歌大観の歌番号である。以下、算用数字についてはすべて同じ。

(10) 和漢朗詠集「梅花雪を帯びて琴上に飛ぶ 柳色煙に和して酒の中に入る」[巻上 春梅]。引用本文は、講談社学術文庫「和漢朗詠集」(川口久雄 昭和五七・二一 講談社)、なお本書「参考」欄にも掲げられているが、「栄花物語」巻第二十四「わかばえ」に中宮大夫(藤原齊信)がこの句を吟誦した記事が見える。

(11) 注(7) 掲出の「新編全集」を始めとする、現代における代表的な注釈書「源氏物語評釈」(玉上琢弥 角川書店)、「新潮日本古典集成」(新潮社)、「新日本古典文学大系」(岩波書店)を指す。

(12) 例えば新編全集本の現代語訳には、a歌「この梅の花はこれを手折るあなたと心が通っているのでしょうか。外には色が現れないで、内においを包んでいます。あなたは何気なくよそおいながら、内心ではあのお方を恋い慕っているのではあるまいか」[早蕨巻三四八頁]、b歌「ただ梅の花を賞美しているこの私ですのに、それがそのような言いがかりをおつけになる花の枝なのでしたら、はじめからそのつもりで折るべきでした。あのお方を私が頂戴すればよかったですね(傍線引用者。以下同じ)」[同頁]とある。

(13) 新編全集本頭注には「匂宮と薫は中の君をめぐって対立しかねない動機をはらんでいるが、語り手はその二人を、睦まじい仲と語

【源氏物語】早蕨巻「梅の香」の贈答歌(磯部 一美)

りおさめる」[早蕨巻三四九頁 頭注一一]とある。また注(4) 掲出の小町谷論文も、「匂宮は薫が大君の死後も宇治に主人顔で親しく出入りしているのを見て、「女ならば必ず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひに思し寄るも、なまうしろめたかりければ」(総角)と、自分の行状を顧みて、薫と中の君との仲を邪推するようになり、このことが中の君引き取りにつながることになる。この贈答歌は冗談めかしてはいるけれども、薫も内心の君を匂宮に譲ったことを後悔しており、心底を見すかされたところもあって、両者の間に中の君をめぐって心理的対立の火花が飛び散っているのが緊張感を伴って詠出されている」と指摘する。

(14) 注(13) 掲出の小町谷論文(点線部)に指摘があるように、氏もまた本文Aの場面に匂宮の中の君引き取りの契機を読み取っている。しかしそれは匂宮が「自分の行状を顧みて」、換言すれば薫の中の君恋慕への疑念なのであって、中の君への直接的な疑念と考える本論とはその主張を異にする。

(15) 玉上評釈は、「この解では露骨すぎる」として、この説をとらない。  
(16) 後撰和歌集の引用本文はすべて、新古典文学大系「後撰和歌集」(片桐洋一校注 平成二・四 岩波書店)に拠る。なお、一部私に表記をあらためた箇所がある。

(17) 正確には四回である。①「(后宮ハ中ノ君ヲ)二条院の西の対に渡いたまひて、時々も通ひたまふべく、忍びて聞こえたまひければ……(匂宮ハ)おぼつかかなるまじきはうれしくて、(中ノ君ニ)のたまふなりけり」[総角三四〇頁]、②「宮は、(宇治ニ)おはし

ますことのいとところせくありがたければ、京に渡しきこえむと思したちになり」「早蕨三四八頁」、③「宮も、かの人(中ノ君ヲ)近く渡しきこえてんとするほどのことども、(蕨ニ)語らひきこえたまふ……」「早蕨三五〇頁」、④「浅からぬ仲の契りも絶えはてぬべき(宇治ノ)御住まひを、いかに思しえたるぞ」とのみ(中ノ君ニ)恨みきこえたまふも……」「早蕨三五二頁」。

(18) 中の君の心情の推移という点からも、ここには「あらじ」を認めるのが自然ではないかと思われる。同様の例として、「あふことのあらしにまよふ小ぶねゆゑとまるわれさへこがれぬるかな」〔35さい宮のくだりたまふに 九条右大臣集〕〔新編国歌大観〕第三卷 私家集編Ⅰ 家集〕があるが、この「あらし」に「あらじ」の意が掛けられているのは明白である。一方、注(4) 掲出の小町谷論文は、「あらし」の掛詞について、諸説を整理し、次のように述べている。「『あらし』に「嵐」と「あらじ」の掛詞を認めるかどうかについて、解釈が分かれる。『評釈』や全集本では認めず、大系本や集成本では認めて、中の君が上京したら見る人もあるまいという意に解している。語勢から言えば掛詞を認めたいところである。掛詞を認めた場合、「あらじ」という未来形から「人」を中の君とするのが通説だが、大君亡き今も、中の君が立ち去った後も、と少し広げた解釈をしたらどうであろうか。「嵐」は惑乱の意と共に、荒廢の意にも用いる。大君も今はなく、自分は途方にくれているが、このさびれてしまった宇治の邸宅は今後ますます荒れ果てていくことだろう。そんなに心細い思いでいるところに、大君在世の折りを思い出させるように、なつかし

い蕨が慰めに来てくれた」と感謝しているのである。また、新編全集本、新大系本はともに掛詞を認めている。

(19) 吉井美弥子氏は、その論「早蕨巻の方法—巻頭表現を起点として—」(中古文学論攷 昭和六〇・一〇 早稲田大学大学院中古文学研究会)の中で、(引歌と関連させて)「物語の表現は、大君を、すでに思い出されるべき「過去」の人として規定しようとしている」と考えられるのである」と述べている。

(20) 注(18) 掲出の小町谷論文(点線部)は、中の君の贈歌に、蕨への感謝を読み取る。また三田村雅子氏は、その論「方法としての〈香〉—移り香の宇治十帖へ—」(平成八・三 有精堂)の中で、中の君の贈歌は「大君に託して表明された中君の、蕨への思慕であり、執着なのである」と述べている。

(21) 拙稿「源氏物語」宇治中の君の孤高性—独詠歌「山里の松のかげにも」の解釈をめぐって—(愛知淑徳大学国語国文 第23号 平成一二・三)

(博士後期課程満期退学・研究生)